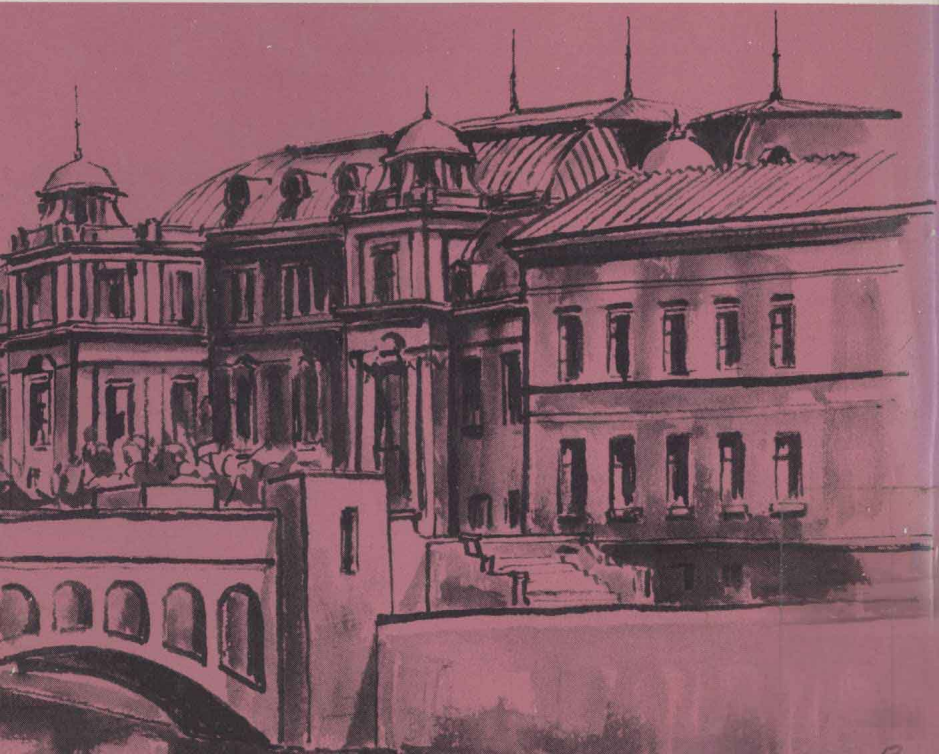
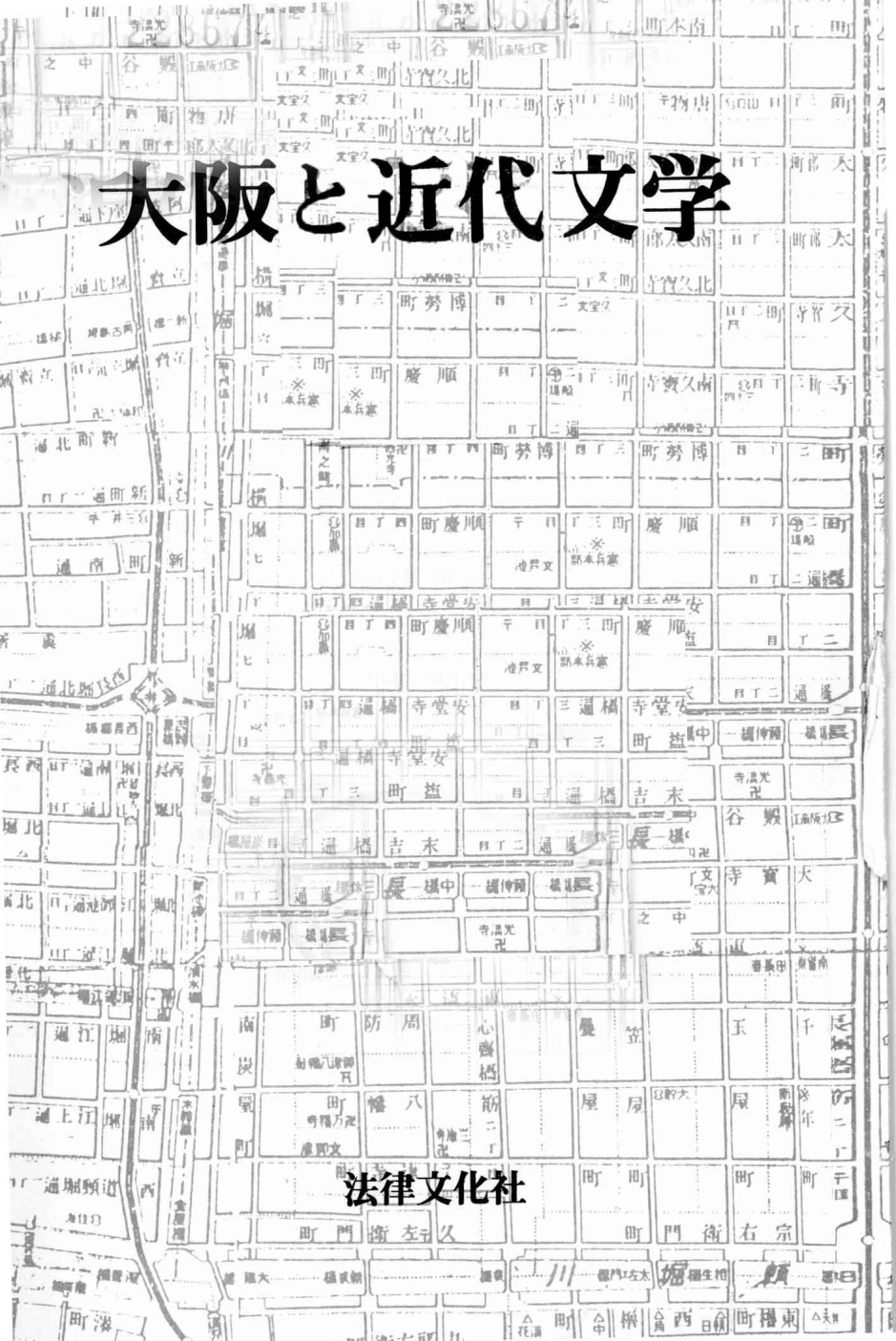


大阪と近代文学

小林 豊著



大阪と近代文学



法律文化社

著者略歴

小林 豊 (こばやし・ゆたか)

大阪府に生まる

旧制大阪外国語学校 (現在大阪外国語大学) ドイツ語部卒業

現在 大阪樟蔭女子大学・相愛女子短期大学・大阪女子学園短大講師。日本文芸家協会会員

著書 『説話のなかの民衆像』(三省堂) 『愛と人生の名言』(むさし書房) 『近代文学に学ぶ』(法律文化社) ほか

〈検印省略〉

1989年6月30日 第1刷発行

大阪と近代文学

著 者 小 林 豊

発 行 者 柴 田 穂

発行所 株式会社 法律文化社

京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71
振替京都2-10617番・Tel(075)791-7131

©1989 Yutaka Kobayashi, Printed in Japan

ISBN4-589-01476-9

共同印刷工業株式会社・酒本製本所

まえがき

西鶴や近松を産んだ近世以来、大阪は日本の文学都市として極めて重要な位置を占め、近代文学の中で、いわゆる〈大阪物〉といわれる小説のジャンルが形成された。この書物はこうした小説——詩や随筆を一部含むが——を通じて〈大阪〉への知と愛を持っていただくために、書き下ろしたもので、原作を抄出し、それに簡単な注解を付けてテキストとしても使えるように配慮した。

〈大阪〉といっても、その性格は単純に概括できないし、また日々に変ぼうしていることはいうまでもない。しかし〈大阪的なもの〉が根本のところではあまり変わっていないだろうことは〈日本的なもの〉と同様である。読者は本書によって、それぞれの〈大阪〉を発見し、あるいは再認識をしてほしい。著者としては「おもしろい都会やで、大阪は」(小野十三郎)というのが実感である。出版についていろいろご配慮をいただいた法律文化社専務井上重信氏、また表紙カバー絵を煩わせた向井林三画伯に厚くお礼を申し上げる。

一九八九年初夏

小林 豊

はしがき

一、原作の引用に当たっては底本を尊重した。底本は各作家の小伝末尾に明示した。

一、引用は本文より一字下げて引用であることを示した。ごく短かいものは本文中に「」で示した。(略)はその箇所を省略したことを、また末尾の和数字は章を示す。

一、原作の漢字はすべて新字体を用い、新字体のないものはそのままにしたが一部、代用漢字を用いた。送り仮名、仮名遣い、振り仮名も底本に従ったが、新しく振り仮名をつけて読みやすいように配慮したものもある。その場合、必ずしも歴史的仮名遣いにしていない。

一、()内の「明」は明治「大」は大正「昭」は昭和を示す。

目次

まえがき

第一章 潮の遠鳴り〜近代文学を彩る人々……………一

佐藤春夫「晶子曼陀羅」

第二章 〈大阪おんな〉の系譜……………二七

上司小剣「鱧の皮」

織田作之助「夫婦善哉」

第三章 〈ぼんち〉の世界……………五〇

岩野泡鳴「ぼんち」

里見 弴「父 親」

次 第四章 風変わりな人々……………七〇

宇野浩二「楽世家等」

梶井基次郎「のんきな患者」

目

第五章 底辺に生きる……………九七

武田麟太郎「釜ヶ崎」

開高 健「日本三文オペラ」

第六章 反骨の風土……………一二〇

野間 宏「真空地帯」

野上弥生子「秀吉と利久」

第七章 花街と遊里……………一四二

泉 鏡花「南地心中」

近松秋江「青草」

第八章 谷崎潤一郎の大阪……………一六一

卍(まんじ)

蓼喰ふ虫

第九章 大阪への文明批評……………一七七

水上瀧太郎「大阪」

横光利一「家族会議」

小出檜重「ややこしき漫筆」

小野十三郎詩集「大阪」

大阪の小説家——結びにかえて……………	二〇七
大阪近代文学年表への試み……………	二一一
参考文献……………	二二七
大阪の主な文学館・文学碑・墓地……………	二三〇

第一章 潮の遠鳴り―近代文学を彩る人々

——佐藤春夫「晶子曼陀羅」

明治二十年代は日本の近代文学誕生期であるが、同じことが大阪についてもいえる。後に日本の社会主義運動の産みとなった堺利彦（枯川）は、ちょうどそのころの大阪で、文学青年としての一時期をすごした。自伝『堺利彦伝』（大13）の中で「東京では文学界が非常な賑ひを示し『硯友社』『都の花』『早稲田文学』『柵草紙』『逍遙』対『鷗外』『紅露一家』などいふ形勢であつたが、大阪では天囚氏を中心として、明治二十五年に『浪華文学会』といふ団体が起つた。そして雑誌『なにはがた』『浪華文学』などが出た。それらと前後して、他に幾つもの小文学雑誌も出た。大阪の文学界も可なり賑かだつた。」と當時を回想している。「天囚」とは、渡辺霞亭とともに朝日新聞系の大衆小説家として、当時、大阪文壇の大御所的存在であつた。「浪華文学」とは「なにはがた」の後身「浪花文学」のことであらう。天囚の門に入り、浪華文学会に入会した堺は、同門の上司小剣と親しくなり、夏の一夜を中之島公園で共に明かしたりする。「隔牆物語」といふ短篇が、鷗外先生の「柵草紙」に採録された時など、内心ずるぶん得意だつた。」とも書いている。「堺利彦伝」は大阪の近代文学の誕生期を知る上で貴重な資料である。同じころ（明治二十五年）金沢の徳田秋声も志を得ないまま兄を頼つて来阪、西区京町堀の寺



の兄の下宿に身を寄せた。自伝小説「光を追うて」(昭13)や短編「西の旅」(昭15)には、この文学青年が世に出るためになめた辛酸がにじみ出ている。大阪の近代文学史の一つの断面でもある。秋声はそのころ大阪で声名の高かった宇田川文海を訪問する。「光を追うて」の一節。

大阪にも新しい潮が流れこんでゐて、大朝^①では南翠^②が中央から迎へられ、大毎^③では幽芳^④が出現してゐた。文海もその頃、バタ臭い大時代物を書いてゐたが、誰が見ても種子はキング・レヤアであつた。そこへ付けこむだけの知恵があつた訳ではなかつたが、ちやうどリッパンウキンクルの覚束ない訳しかけがあつたので、たゞ文章だけ見てもらふ積りで、それを持つて再び玄関へ現はれた。(略)やがて文海が現はれ、原稿を手につつて反覆して読んでゐたが、肩間に仄^ほめく難色は隠せなかつた。

「もつと読んで見んと解らんが、大変硬いな。」

気忙^{きせは}しさうなので、等は^{ひとし}やがて辞した。

二十八

〔注解〕①大阪朝日新聞の略。②姓は須藤。政治小説で知られた。③大阪毎日新聞の略。④姓は菊池。新聞小説の先駆者。⑤シニイクスピアの「リア王」。⑥イギリスの作家アーヴィングの「スケッチ・ブック」の中の一物語。なお「光を追うて」の出典は「秋声全集」第十八巻(臨川書店)

結局、文海に「新聞には不向きだ」と断わられ、折角、連載を認められた「大阪新報といふ二三流の新聞」への小説も「難しくて読者に受けない」と途中で打ち切られる。当時の大阪の新聞読者は、まだまだ、純文学志望の秋声の小説なぞ受け入れなかつたのであろう。ちなみに「大阪

「新報」は後の夕刊紙「大阪新聞」の前身で、明治末期、岩野泡鳴いわたけが一時、記者として入社し、「発展」(明44、45)を連載したことがある。……やつと「葦分船」あしわけぶねという雑誌に認められた。

等がこの大阪にも文学青年のグループがあり、小さい雑誌の発刊されてゐることを知つたのも、ちやうど其の頃で京町堀にある其の発行所の文人を知つてゐる、兄の示唆もあり、ふと思ひついて短篇を一つ書いて、わざと郵送してみた。

雑誌は多分大阪における最初の文芸雑誌であつたであらうか、わづか八頁か十頁そこそこのパンフレットで「葦分舟」あしわけぶねといふものであり、いくらか硯友社の系統をひいた芝廼園しばのえんといふ神戸の会社員である、文学青年の仲間によつて出版されてゐたもので、発行所になつてゐる雑誌店の主人も、そのメムバの一人であつた。

すると正月になつて、或る日兄が大毎の批評欄に、その投稿小篇の批評の出でゐるのを発見して、

「お前さんのものが大層讀めてあるわい。」

と言つて女のやうに目元に微笑を浮べて等にも見せた。等はそゝくさと其の批評に目を通して竊ひそかに感謝したが、何んだといふ顔で押しやつた。それは大阪の町の暮の叙景から初まつてゐるものだつたが、先の成竹せいちくがある訳でもなかつたし、「葦分舟」にさほど敬意がもてなかつたので、大して刺戟にもならなかつた。(略)

大分たつてから、或る日「しがらみ草紙」を買ひに、その店頭へ立ち寄り、四十近くの主

人にも逢つてみると、続稿を書くやうにと言はれたのだつたが、悪戯いたづらに書いたものが過つて活字になつてみると、感興も却つて失せてしまつた。

三十

いかにも秋声らしく、冷めた書き方をしている。大阪の作家や文学雑誌に対して、秋声はあまり敬意を持っていなかったのであらう。ちなみに秋声の投稿小説は「ふぶき」で「葦分船」の一、三月号に載つた。署名は「御月楼主人」。明治二十六年、秋声二十二歳であつた。

新聞大衆小説が巾を利かし「なにはがた」や「大阪文芸」も旧文学的な色彩が濃かつた中で、船場の医師の家に生まれた高安月郊たかやすげうが、早くから外国文学に親しみ、日本で初めて、ノラの「人形の家」の抄訳を「一点紅」の創刊号（明治二十六年四月）に掲載、大阪文学の質の向上に尽くした。署名は茶毘散士だびさん。「しかし何の反響のある筈も無く、大阪の女はまだくおさんに同情してゐた！ またドストエフスキーの『損害と侮辱』を訳出したが元禄文学流行の世に張合も無く、肝癢かんよくを起して原稿を引裂いた。」と、彼は後年「明治文学と上方文学」（昭8）の中で回顧している。おさんとは近松の「心中天網島てんあみじま」の〈耐える女〉である。月郊は「大阪にも生家にも絶望して」京都に赴く。彼は明治文壇に劇作家として活躍し、「江戸城明渡」（明36）は著名の作。「大塩平八郎」（明35）でも知られた。詩人・比較文学研究家としても知られ『東西文芸評伝』（昭4）には、明治の大阪の文芸界の動きが書かれている。

が、時代は確実に動く。月郊が大阪に絶望して去つた数年後の三十年四月、中村吉蔵、高須芳次郎（梅溪）、小林政治といった二十代の青年が旧文学打倒を目ざして浪華青年文学会（後の関西

青年文学会)を結成し、七月には、機関誌「よしあし草」(後の「関西文学」)を発行した。中村は後に早大教授・劇作家として、高須も日大教授・評論家として名を為すが、当時は天神橋南詰めの大阪郵便局為替貯金管理支所の同僚で、小林とともに投書雑誌「少年文集」の投書家であった。小林は船場の毛布問屋の若主人で、高須の「大阪最初の文芸講演会」(昭8)によれば「創刊号は僅かに菊版十六頁であつたが、中村と私とが巻頭に書いた文芸評論が『早稲田文学』記者の注目を惹^ひき、また「渡辺霞亭氏らの小説を『チョン鬻^{まげ}小説』と罵倒」するなど、意気軒高たるものがあつたようである。第二号からは当時「文庫」派の詩人として聞こえていた堺市北旅籠町の河又呉服店の若主人、河井醉^{すいめい}茗が参加した。また、三十二年の夏には、土佐堀の青年会館で、新体詩人として有名だつた湯浅半月^{はるひ}らを招き「大阪で最初」と高須のいう文芸講演会を開いた。

彼らはいずれも無名の青年だつたが、後には与謝野晶子(鳳^{おとり}晶子)を会員に迎え、さらには与謝野鉄幹(寛)を大阪に招いて、二人を結びつける機縁を作つた。そして明治浪漫主義文学の牙城「明星」の隆盛に大きな陰の力になつた。……その晶子の反俗的な生き方を自在な構成で描いた佐藤春夫の戦後の代表作「晶子曼陀羅」(昭29年3-6)は、晶子を中心とした大阪近代文学の青春の息吹きを伝える。佐藤の創作が少なからず混じつてはいるが。

堺の老舗の菓子商、駿河屋の三女鳳^{ほげ}晶子——以下「晶子」で記述——は九歳で漢学塾に学ぶほどの早熟で、堺女学校(今の府立泉陽高校)を出てからも暇を見ては和漢の古典に親しんだ。

堺の大道、甲斐町の駿河屋^{だいちう}では二階の天井の低い一室で、召使らがしようとはんと呼び慣

らはしたこの家の三番娘が、土佐半紙をひろげて「長恨歌」の写本に熱中してゐた。

元来、鳳晶子は筆名で、本姓は鳳、名もしようだから、その本名に上方言葉で令嬢をいういとはんのいを省略したとはんをくつつけてしようとはんという敬愛称ができてゐた。

静かな春雨に市中の物音もなごみ、こんな仕事には気が散らない。また本には返り点があり、白楽天の美しい詩句もぼんやりとはわかり面白げなしようとはんは興に乗る写本の筆もはかどつてはゐたが、こう一日中部屋にこもつてそれにばかりかかり入つてゐたのでは、このごろ家に引き取られて来て、家事や店の仕事ばかりさせられている腹ちがひの姉の花子にも悪いという心づかひもあつて、昼間を時々は母の手助けに台所をのぞきに出かけ、夜は夜で店に小豆などを選ぶ夜なべの仲間にも加わる。こういう心づかひもなかなか細かいので召使いや店の者たちにもいたはりがあり自然と親しまれてゐた。

そぼ降る雨は二日二晩ふりつづいた。写本はその間にはでき上らなかつた。いくら興に乗り、気があせつても夜は十二時になると電灯は消えるのであつた。第一章三

〔注解〕①晶子の生家の屋号。羊かんで有名な駿河屋は和歌山が本店で、ここはその出店。②白楽天が女宗と揚貴妃のロマンスを歌った長詩。③晶子の父宗七の先妻の二女。十四歳で、母の実家から父の家引き取られた。④つね。美しくはなかつたが「家事一切はむろん、遊芸にも堪能」だった、と作中に見える。

晶子は、花子が嫁いだ後、彼女に代わつて帳場格子に入るが、佐藤春夫は得意の想像力を駆使して、帳場格子で暇を盗んで読書する彼女が、やがて、男女差別の不合理さに気づく姿を鮮やかに描いてゆく。

花子が嫁入りしてからは晶子はその姉の今までの役をあてがはれ、はりませの障子のかげ、帳場格子に陣取つて日々の売り上げをせつせと帳面に付けるのが務めであつたが、余暇を偷んでは古来の史書や文学にゆつくり目をさらすのであつた。以前倉の長持の蓋の上でおちおちともせず読んだ大鏡や栄華、源氏物語や落窪、狭衣さては八代集など、今は父の文庫を借りるまでもなく自分の小づかひ銭で買ひ蓄めた博文館の活版本『日本文学全書』の手ごろの大きさに取扱ひに都合のいいのを座の前後左右を問はず人目にかからないところならどこにも積み置いて帳場格子は晶子にとつてはひそかに頼もしい書城ともなつてゐた。

第二章十

晶子は帳場格子のなかの読書だけでは満足しなかつたから、毎日夜なべの終るのを待つて、十二時には消える電灯の下で両親に隠れながら、やつと一時間か三十分の明りをなつかしき清少納言や紫式部など寛弘の女房たちの筆の跡をしたひ、興そぞろに飽かぬところで消えた灯を怨みながら枕に通ふ海鳴りに耳を仮しつゝ東京にいる兄秀太郎を思ふのであつた。必ずしも兄が恋しいのではなく羨しいのである。人にかくれて袖屏風のかげで本を読む女の身でなく、灯が消えればランプを呼んで、思ひのままに本を読み学問のできる男子が羨しいので、兄の秀太郎はおほどかにうるおいのある父の心情と数理に精しい母の明晰な頭脳とを併せ恵まれた上、その才能を磨くためにはどれだけでも学問をゆるされてゐるのである。それが羨しいばかりでなく、それが男子の特権になつてゐるのは不合理だ、けしからぬという憤ろしささへ湧く。この不平を、あの海の遠鳴りの如く吼えるやうに呻き立て鳴らしてみ

たいさびしさもある。

第三章十一

〔注解〕①種々の書画をまぜてはること。②帳場を照うためにめぐらせた低い格子。結果。③東京にある、当時の著名な出版社。④平安中期の女官たち。⑤後年の晶子の名歌「海こひし潮の遠鳴りかぞへつつ少女となりし父母の家」を踏まえた。当時、晶子の生家からは大浜海岸まで六百メートルぐらいだった。⑥長兄。東大工学部に学び、後に東大教授。⑦袖で顔を覆い、びょうぶの代用すること。

しかし「帳場格子に幽閉された青春の鬱屈」は、黒い胡蝶のように出口を求めて狂う。彼女は激しく、彼女を閉じこめるものをのろった。「父は飲酒家、母は無智、雇人は風儀の悪い者多く、親戚は吝嗇でなければ強欲、土地は邪智、無趣味淫蕩の人に満ちてゐた」と晶子は後に書く。

晶子が河井醉茗を通じて、浪華青年文学会改め関西青年文学会の堺支会に入会したのは、明治三十二年であった。そしてこれが、彼女の運命を大きく変えることになった。ここで彼女は、会員の一人、同じ堺の覚応寺の跡取り息子河野鉄南と知り合い、やがて、鉄南と幼友達だった与謝野鉄幹の記憶に彼女の名が刻まれるようになる。鉄幹が「明星」創刊(明33)に当たって、鉄南に書き手の推薦を依頼したところ、鉄南が彼女の名を出したからであった。

ところで鉄幹は堺と因縁が深かった。明治六年、京都・西本願寺支院願成寺の子として生まれた鉄幹は、父の事業失敗のために幼時から流浪の生涯を送り、十六年、十一歳の時、大和川を経て堺と隣接する大阪府下住吉の遠里小野村(現大阪市住吉区遠里小野町)の安養寺の養子となり、そこで近隣の子供たちに読み書きを教えるかたわら、堺に通って漢籍や漢詩、英語を学び、奇才

を謳うたわれた。同じくお寺の息子だった河野鉄南と知り合ったのはこのころである。才能をたのむ彼は、三年後、養家を脱出して岡山に去るが、鉄幹と晶子を結びつけたのは、当年の堺の文学青年河野鉄南ということになる。例の「やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君」は、鉄幹ではなく鉄南を意識したものと佐藤は推理する。すでに定説になっているが。

さて鉄幹は鉄南の推挙した数人から晶子に白羽の矢を立て、鉄南を通じて「明星」に歌を送るように言ってきた。この間の事情について佐藤は「鉄幹としては駿河屋が堺の豪商であることも知つてゐたし、むかしその店頭で美しい少女を見たおぼろげな思ひ出などもあり、もしやその少女かという気もあつたのである。」と何がしかの空想を混じえて書いている。

晶子は心をときめかせて七首送り、うち六首が三十三年五月の「明星」第二号に採用された。その中に

肩あげをとりて大人になりぬると告げやる文のはづかしきかな

すでに二十をすぎながら少女より幼い、素直な心の流露がある、と佐藤は評している。

二人の距離はずんずん狭まってきた。その年の八月五日、「よしあし草」の歌壇の選者でもあるし「縁故の深い関西の土地に新詩歌の運動を働きかけてみよう」と考えた鉄幹は関西青年文学会例会での講演に招かれて三日に大阪、北浜の平井政七旅館に投宿した。「その翌四日には入門を請う者、会との連絡のために来た者など数人の客のなかに、葦あしの絵模様のあるかたばらに白地の帯の晶子は中年のお歌をお供につれてゐた。この時、梅花ばいか女学校の学生山川登美子は鉄幹の